

イスラーム国家としてのパキスタンにおける歴史言説

—ウルドゥー語教科書の分析から—

須 永 恵美子 *

Implications of Historical Discourses in the Islamic State of Pakistan: School Textbooks in the Urdu Language

SUNAGA Emiko*

This paper aims to study historical discourses of Pakistan in the context of the modern Islamic world. Although the history of Pakistan has long been a subject of study, there is little agreement on the define of Pakistani people or Pakistan itself. School textbooks offer a key to understanding how Pakistani people share a historical view of the dynamic transformations in South Asia. Here, I analyse historical discourses to show the historical perception of Pakistan based on primary documents written in Urdu: for example, textbooks for Urdu language and Pakistan Studies for Pakistani students (primary and secondary level), published by the Punjab or Sind state government textbook board. Textbooks are categorised into four periods: first, the Islamic Sultanate State to the Mughal period; second, the British colonial period to the freedom movement; third, Kashmir and the national security force; and fourth, multi-ethnicity and the Islamic brotherhood. I will clarify the historical discourses and determine the image of nationhood in Pakistan.

1. はじめに

1.1 本稿の目的

イギリス植民地帝国としてのインド亜大陸が分離独立してから 60 年あまりが経過した。現在では、パキスタンとインド、バングラデシュにわかれ、それぞれ独自の道を歩んでいる。これらの国々では、独立後に「国民史」に基づく歴史教科書の刷新が行なわれ、共有していたイギリス植民地帝国としての南アジアの歴史評価も多様化しつつある。細部の事実はともかく、統一的な歴史観を共有することは、もはや現実的ではなくなっている。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, 日本学術振興会特別研究員 (DC), Research Fellow of the Japan Society for Promotion of Science (DC)
2012 年 3 月 12 日受付, 2012 年 10 月 23 日受理

本稿の目的は、現代パキスタンの学校教科書において、ムスリム社会とその歴史がどのように描かれ、評価されているのかを分析し、その特徴を明らかにすることにある。さしあたり、現在パキスタンで問題意識が共有され、取り上げられることの多い (1) イスラーム王朝史、(2) イギリス植民地支配と独立運動、(3) カシュミール問題とバングラデシュ独立、(4) 諸民族・諸宗教の平等の 4 項目に焦点を絞って、教科書における記述のあり方を検討する。

1.2 パキスタンにおける教育についての先行研究

本稿で扱う教科書とは、学校の中で使われる学習用教材を意図している。2009 年までに発行されている教科書は教育省による検閲を経ているため、国の公式見解とみなすことができる。教科書を発行するシステムについては 3 節で詳しく述べる。

これまで、パキスタンの教科書を具体的に分析した研究は多くない。日本では、加賀谷によって現地の教科書が翻訳され、1980 年代の愛国主義的な歴史観が明らかにされており、当時の教育を知る貴重な資料となっている [ハミード・チョウハダ 1985]。その他の先行研究では、教科書における誤植、年号のミス、事実の取り違えといった誤用の指摘が多くなされ、その質に対して批判的なものが多い。歴史家のアズィーズは、教科書は誤用と隠蔽と政治的プロパガンダに満ちており、信頼できないと述べている [Aziz 1993]。ナイヤールも同様に、公立学校の質の低い教科書を批判している [Nayyar and Ahmad 2004: 123]。

また、言語学・教育学者のラフマーンは、「国家の意向は歴史・パキスタン学・言語学（ウルドゥー語）の教科書を通じて流布される。それは民族アイデンティティを捨て、軍国主義を擁護する、愛国的なパキスタン人を育成することを目的としている」ことや [Rahman 2000: 18]、「教科書は遺漏、誤り、生徒がヒンドゥーを憎悪するように仕向ける論調を含んでおり、さらには過分に愛国主義的で軍国主義的である。戦争や暴力を賞賛しており、平和的解決よりも力による闘争を好むように仕向けている。教科書は、若者に反ヒンドゥー、反インド、戦争賛成といった熱狂的な精神を埋め込むための手段として、イスラームを利用し、正当化している」ことを批判している [Rahman 2002: 119]。このように、教科書はその偏った内容ゆえに学術書として信頼が置けないというのが、研究者のみならず国内でも一般的な見解である。同様の批判・反省は教育現場においてもなされているが、代替となる教科書やカリキュラムはいまだに編み出されていない。

内容への批判が強いものの、教科書は「パキスタンの生徒の小さな世界」にとって絶対的な支配力をもっている [Aziz 1993: 1]。イギリスとパキスタンの教育を比較したアッバースは、インフラの整っていない発展途上国ほど、一冊の教科書に依存する傾向にあることを指摘している [‘Abbās 1993: 27-28]。また、パキスタンでは教育省の発行するカリキュラムを末端の学校が把握しておらず、教師も生徒と同一の教科書を読み上げるだけである [‘Abbās 1993: 53-54]。その背景には副読本が整備されていないことや、指導要領のまとめられた教師用の

手引書の不在などが挙げられる。¹⁾ さらに、授業の形態は暗記教育が重要視されている。²⁾ 授業では（ほぼ教科書どおりである）教師の言葉と教科書の中身を繰り返し読み上げ、記憶することに学習の力点が置かれている。

1.3 本稿の対象と構成

学校教育における歴史言説を探るにあたり、パキスタンでは現在歴史の授業が行なわれていないことに留意したい。代わりに、ウルドゥー語（国語）³⁾ や社会科・パキスタン学の教科書の中で歴史に関する項目が教えられている。本稿では、パキスタンのパンジャブ州とインド州で使用されている1年生（日本の小学校1年生に相当）から10年生向けウルドゥー語および社会科・パキスタン学の教科書を分析の対象としている。教科書は必ずしも網羅的ではない。なお、高等学校向けの教科書や、私立学校で使用されている教材も適宜参照している。

教科書の中でも、特に着目するのは（1）イスラーム王朝史、（2）イギリス植民地支配と独立運動、（3）カシュミール問題とバングラデシュ独立、（4）諸民族・諸宗教の平等の4項目である。（1）はパキスタン建国以前の古代史や、いわゆるイスラーム王朝史を含む。（2）はイギリスがインド亜大陸を植民地支配していた1857年から、1947年8月のパキスタン独立までを対象とする。パキスタン・インド分離独立では、宗主国イギリスと被植民地という軸だけではなく、国内のムスリムとヒンドゥーとの対立により大勢の犠牲が出た。（3）はパキスタンの領土・国境線に関する問題である。カシュミール問題は独立以降、パキスタンと隣国インドの最大の係争点である。また、バングラデシュは1971年のパキスタン・インド戦争の結果、パキスタンから独立した経緯をもつ。（4）は、複数の民族・言語・宗教が共存している現在のパキスタンにおいて、いかにしてこれらを平等に扱い、国家の一体を保っているのかを問うことになる。

先述の4項目について教科書に表出する言説を分析することは、パキスタンのイスラーム認識や自国史観の一端を明らかにすることにつながる。初等教育の教科書を取り上げる意義は、これがパキスタン国内で最も広範に共有されている本と考えられるからである。パキスタンでは学年が上がるにつれて進学率が低くなり、学校教育から離脱する生徒が増えている。このことから学年の低い時に使った教科書こそが、より広いパキスタン人に対して一定程度の影響を与えていると思われる。

1) 筆者のフィールド調査（2007年9月）では、生徒の手にする教科書と教師の手にする教科書は同一のものであり、日本のような教師用の指導書は存在しないことが確認された。

2) 筆者の留学していたカラチー大学ウルドゥー文学部修士課程の授業においても、同様の光景がみられた。授業はすべて講義形式がとられ、学生は講師の言葉を一字一句書き取り、学生からの質問などは挟まれない。試験においては、いかに教師の言葉を正確に再現できるかという点が重要視される。

3) 言語科目としてのウルドゥー語を教える授業は、「国語 Qaumi Zabān」ではなく「ウルドゥー語 Urdu」と呼ばれる。

まず次節では、パキスタンの教育制度と教育言語についてその変遷をまとめる。3 節では、学校の区分や教育の現状について整理したうえで、教科書制度とその全体像を把握する。4 節では、具体的に教科書の事例を分析する。最後にそれまでの言説でみられた内容をまとめ、パキスタンで共有されているムスリム社会に関する歴史認識を提示する。

2. 教育制度と教育言語の変遷

現在のパキスタン国内では、母語話者の多い順にパンジャービー語、パシュトー語、スインディー語、サライーキー語、ウルドゥー語、バローチー語など 50 以上の言語が話されている。ウルドゥー語の母語話者は全国民の 8% 程度であるにもかかわらず、憲法で国語に定められており、全国の学校で教育言語とされている。

本節では、ウルドゥー語がどのような過程を経てパキスタンの教育に定着していったのかを明らかにするために、まずパキスタンの教育制度の全体的な変遷を概観する。その際、教科書とイスラーム教育の扱いに着目する。それから教育言語の定着過程をまとめる。

2.1 教育制度の変遷—イスラームを教える制度

1947 年 8 月 14 日、イギリス植民地帝国インドから分離してパキスタンが独立した。国土はインドを挟んで東西にわかれており、東パキスタン（現バングラデシュ）と西パキスタン（現パキスタン）にそれぞれ国民を抱えていた。

パキスタンでは建国後、植民地時代の教科書がそのまま使われていた。1950 年代から 1960 年代にかけては、教育そのものや国産の教科書を編纂するための制度が整えられていった。1958 年のクーデタによって政権を掌握したアイユーブ政権下では、教科書を作成、印刷、出版、配布するための独立した組織として、教科書委員会を設立することが決議された [Aly 2007: 80]。

同政権下の 1959 年国家教育委員会では、1 年生から 8 年生までの生徒には宗教教育を必修科目とし、9 年生以降大学までは選択科目とした [Aly 2007: 79-80]。1966 年の「生徒の福祉と問題のための委員会」では、アラビア文字とイスラームの五行については 2 年生から学習を始め、預言者ムハンマドの生涯や、誠実・正義・公正といったイスラームの徳についても教えられるべきであるとした⁴⁾ [Aly 2007: 80-81]。また、科目については、学校教育から歴史の授業が削除され、代わりに社会科（低学年）とパキスタン学（高学年）に置き換えられた。

アイユーブに続くヤヒヤー政権の 1970 年新教育政策では、宗教教育を従来の 8 年生から 2 年生引き上げ、10 年生までを必修科目とした [Aly 2007: 80]。また、同政権では教科書策定についての制度化が進み、教科書を作成するために学者、作家、教育者による委員会が発足し

4) 当時は宗教以外の科目についてもイスラーム化への要望が強かった。しかし、物理、数学、化学などの科学系の教科や、専門的な技術をどのようにイスラーム化するのが障害となったため見送られた [Aly 2007: 80]。

た。各州は他の委員会や教員訓練機関と協力してカリキュラム開発局 (Bureau of Curriculum Development) を設立し、シラバスの標準化も試みられた [Aly 2007: 80].

1950年代以降パキスタンの近代化が促進されたものの、一方で東西パキスタンの経済的格差と文化的対立は解消されていなかった。東パキスタンでは、ベンガル人による自治・独立の闘争が激化し、1971年12月にバングラデシュとして分離独立した。これは「ムスリムの紐帯」によって集結した国家にとって、その建国の理念を否定される事態であった。同年に政権をとったZ. A. ブットーは、国家の統合のためにイスラーム社会主義を標榜し、国内の民間企業や私立学校、マドラサを国営化⁵⁾し、国民服を制定した [Aly 2007: 79; Burki 1991: 167; 山中 1992: 86-88]. 教科書については、バングラデシュ独立を機に、旧西パキスタンの各州 (パンジャブ、スインド、北西辺境州,⁶⁾ バローチスタン) に教科書委員会が設置された。各州には、国立カリキュラム局 (National Curriculum Bureaus) やカリキュラムセンター (Curriculum Centre) が開設され [Aly 2007: 80], 1976年には教育省による教科書の検閲と承認の制度が施行された [Aly 2007: 18].

1977年の軍人ズィヤーによるクーデタによって、新たにイスラーム化を指向する政策が掲げられた。1979年国家教育政策⁷⁾では音楽の禁止、ムスリム教師の配置などの方針が打ち立てられ、前政権で国有化された私立学校については、再び設置が認められた [Rahman 1999: 80-83]. モスクの求心性を教育の普及に援用するため、5,000校のマドラサの新設が提唱され、宗教的指導者であるイマームは一般学校の教師と同等の待遇を受けることになった [Aly 2007: 79-80]. これら政策によって、イスラームが教育制度の中枢に組み込まれ、イマームの社会的地位は上昇し、宗教教育の社会的重要性が増した。

1990年代のシャリーフ政権では、大学教育制度の国際標準化が採択され、国際イスラーム大学 (International Islamic University) とバハーワルプール・イスラーム大学 (Bahawalpur Islamia University) イスラーム法コースが新設された [Aly 2007: 78-79]. また、知識のイスラーム化のため、イスラーム学が大学まで必修科目となった [Aly 2007: 78-79]. さらに1998年の国家教育政策では、初等教育から聖典クルアーンの章句を教科書に掲載することが決定され、イスラームやパキスタンのイデオロギーに反する記述はすべての教材から削除された [Aly 2007: 80].

5) 1972年には19,432校の教育機関が国営化された。内訳は18,926校が一般の学校で、マドラサは346校、カレッジは155校、専門学校が5校含まれていた [Aly 2007: 81-82].

6) 現ハイバル・パシュトゥーン・フワー州。2010年に改名。

7) 具体的な方針は、以下の7つである。1) 音楽は学校で教えるべきではない。2) 中等教育まではムスリムの教師が教鞭をとるべき。3) 反イスラームの立場をとる教師は学校から追放されるべき。4) 女性教師は髪を切ってはいけない。5) カレッジにおいてイスラーム学、パキスタン学、経済、軍事教育を必修科目とする。6) イスラーム学の授業の中で、ジハードについては特に学習されるべき。7) 教師は教室内でパキスタンのイデオロギーに反する発言をしてはいけない [Rahman 1999: 83].

2000 年に入ってから、ムシャラフ軍事政権のもと地方分権が進められた。⁸⁾ 2000 年代後半からは、教科書の作成を民間に移行しつつある。これまでも民間が部分的に教科書作成に関してきたものの、2006 年にはカリキュラム局の音頭のもと、複数の民間会社による教科書の出版が呼びかけられ、翌年、国立教科書教材政策 (National Textbook and Learning Materials Policy) が施行された。⁹⁾

以上の教育の変遷から、政府のイニシアチブによって、学校教育にイスラームが積極的に取り入れられてきたことが明らかになった。隣国インドにおいて宗教が教育から極力排除されてきたことと対照的に、パキスタンにおいては教育とイスラームが密接に結びついており、学校においてイスラームを語るのが公然となっている。どの程度のイスラーム教育を施すかという議論はあれど、近代化や社会主義化の時代においても、教育からイスラームを切り離す議論は上がらなかった。

2.2 教育言語の変遷—多言語社会における共通語の確立

1947 年 11 月に当時の暫定首都カラチで開かれた教育会議において、パキスタンで教育と言語に関する最初の声明が出された [PEC 1948: 43]。この時ウルドゥー語が必修科目とされたため、ベンガル語を主な母語とする東パキスタンや、英語を第一言語とするエリート層から反発を招いた [Rahman 2002: 67, 71]。翌年に発表された教育言語の方針は、初級学校では各地域の母語で学習を開始し、5, 6 年生からウルドゥー語を導入、高等教育では英語を使って教えるというように、段階的に教育言語を使いわけたものであった [Rahman 2002: 9]。

1956 年の第一次憲法では、東パキスタンに配慮した形で、ウルドゥー語とベンガル語が国語 (national language) に指定された。アイユーブ政権下の「生徒の福祉と問題のための委員会」でも、ベンガル語を含めた母語言語とウルドゥー語を教育言語として共存させる方針がとられた [Aly 2007: 79]。¹⁰⁾

1971 年に東パキスタンがバングラデシュとして独立したため、1979 年の国家教育政策ではベンガル語の項目が消され、ウルドゥー語が唯一の国家の共通語 (lingua franca) となった。従来の地方言語とウルドゥー語という段階的な教育言語の併用に替わり、教育言語はウ

8) 具体的には、住民コミュニティ委員会 (Citizen Community Board) と呼ばれる地域住民組織を各地に組織し、診療所や学校施設などの開発プロジェクトに政府が資金援助を行なっている [黒崎 2006; Khan *et al.* 2011]。

9) 教科書作成における民間企業の参入は、アイユーブ政権時代から既に始まっていた。特に、印刷や流通といった技術的な側面では、民間への委託が多かった。1990 年代には、教科書の質を向上させるため教科書委員会の独占を禁止し、民間の出版社に教科書の発行を許可した [Aly 2007: 80]。2009 年から本格的な民間移行を始めているものの、2012 年現在で民間の負担増による教科書出版の遅延、流通市場での教科書不足、十分な校正がなされないための複数の誤植・間違いなどが指摘されている [DAWN, Jun 6, 2011, April 12, 2012]。

10) アイユーブ自身は英語を重視し、パキスタンにおけるすべての言語を、その言語の固有文字やアラビア文字ではなく、ローマ字で書き表すべきだと主張した [Khan, A. 1967: 85]。実際にローマ字が導入されることはなかったが、多くの高等学校や士官学校ではウルドゥー語や地域諸言語に替わり、英語が使用されるようになった [Rahman 2002: 74]。

ルドゥー語に一本化された。さらに、すべての授業を英語で行なう英語学校 (English medium school) においても、科目としてのウルドゥー語が必修とされ、宗教学校であるマドラサについても教育言語はウルドゥー語に統一された。

その後、シャリーフ政権によって再び地域言語を取り入れる政策が提唱されたが、基本的にはウルドゥー語が基礎教育のための教育言語となり、高等教育においては英語が教育言語として定着した¹¹⁾ [Aly 2007: 79]。現在の学校の教科書の中では、ウルドゥー語について次のような説明がなされている。

「わたしたちはみんな学校で勉強しています。それからとても楽しく遊んでいます。わたしたちはみんなウルドゥー (urdū) を話します。これはわたしたちの国語 (qaumī zabān) です。わたしたちの国 (waṭan) には4つの州があります。スィンド、パンジャーブ、北西辺境州、バローチスターンです。わたしたちは州の言葉 (ṣūbe ki zabān) も学び、話します」

(スィンド ウルドゥー語 4年生) [STBB 2003c: 21]

「パキスタンはわたしたちの愛しい祖国 (waṭan) です。わたしたちの国語 (qaumī zabān) はウルドゥー (urdū) です。パキスタン人はみんなウルドゥー語 (urdū zabān) を話して、読んで、書いて、学びます。国語の他に、パキスタンではとてもたくさんの民族言語 (qaumī zabān) が話されています。そのため、ウルドゥー語 (urdū zabān) はとても重要なのです。一部の人々は州の地域言語 ('ilāqā'i zabān) も学んでいます」

(パンジャーブ 社会科 5年生) [PTBB 2000b: 72]

「ウルドゥー (urdū) は高度に発達した言語である。その特徴は、異なる言語の単語 (alfāz) を美しく吸収 (jazb) できることである。アラビア語、ペルシア語、トルコ語、その他南アジアの地域諸言語だけでなくヨーロッパ諸言語の単語までも、ウルドゥー (urdū) に取り込まれている」

(パンジャーブ パキスタン学 9-10年生) [PTBB 2002: 108]

これらの記述からは、多言語共存社会を認めつつも、共通語としてのウルドゥー語の優位性や重要性を説いていることがわかる。さらに前項で指摘したとおり、パキスタンの教育制度においてはイスラームの取り扱いが争点となってきた。政府のイニシアチブによって、程度の差こそあれ、イスラームを教育活動の中で語ることを是とする習慣は、ウルドゥー語と並行して

11) スィンド州では、初級学校に限ってスィンディー語が教育言語に採用されることもある。また、州政府の規制を受けない私立学校では英語が使われていることが多い。

漸進的に定着していった。そしてこれらの教科書が、教育省や教科書委員会などにおいて検閲と承認の対象となっており、国家のオフィシャルな声明として普及している。

3. 現在の教育制度と教科書

本節では、現在のパキスタンの教育制度と教科書について概観する。まず学校制度を整理したうえで、そこで使われている教科書について作成過程を追う。

3.1 教育制度の概要

パキスタンでは、一般に初等教育機関と呼ばれているのは初級学校 (Primary 5-10 歳) と初等学校 (Middle 11-13 歳) の 2 段階にわかれており、中等学校 (Secondary 14-15 歳)、高等学校 (Higher Secondary/Inter Colleges 16-18 歳) と続く。その後は高等教育機関として、カレッジ (Degree Colleges) や総合大学 (Universities)、技術学校・職業訓練校 (Secondary Technical/Vocational Institutions) といった選択肢がある。¹²⁾

学校を運営する母体としては、政府、自治体、半官半民、軍、民間、コミュニティ、企業、NGO、個人などが挙げられ、これらの教育セクターは大きく 3 つにわかれている。政府・自治体の運営する公立学校、民間の独立した資本で運営される私立学校、¹³⁾ モスクに併設されるマドラサ (宗教学校) である。パキスタン教育省の 2005 年の統計によると、初等教育から大学教育までの国内の学校数は約 23 万校で、全体でみると 7 割が公立学校である。特に初級学校においては公立学校のプレゼンスが高く、全 12 万校のうち 10 万校を占めている [GoPFME 2005: Table. 1]。

パキスタンの公立学校は、政府の資金援助を受け、各州によって運営されている。基本的にその門戸はすべてのパキスタン人に開かれているものの、義務教育ではないうえに教材費や制服代が別途かかるため、就学率は依然低いままである。科目としては、ウルドゥー語 (国語)、英語、数学、理科、社会科、イスラーム学¹⁴⁾ などが教えられている [松村 2003: 113]。

パキスタンの就学率や識字率は低く、1947 年の独立当初から成人識字教育の問題が指摘

12) 他にも、聾啞などの特別学校 (Special Education Institutions)、遠隔地通信教育、非正規基礎教育を担う団体などが設置されている。

13) パキスタンにおける私立学校は、行政に登録をして政府に認可を受けているものの、資本や運営においては完全に独立している。これらの学校は大地主、産業資本家、官僚、軍人といったエリート階層の子弟の養育機関としての役割を果たしていた [Burki 1991: 167]。この他に、アーガー・ハーン財団の教育部門の運営する学校、NGO や自治体が運営する学校、個人の邸宅などを開放した小規模な学校などが、公立学校の需要が満たされない農村部を中心に多数開校されている [Baqir 1998; Khan, H. A. 1998]。

14) パキスタンでは、憲法によって国教はイスラームと定められている。ただし、非ムスリムも人口の 3% ほどおり、非ムスリムの学生には別教室で道徳の授業を受けさせる配慮がなされている。その際に使用する教科書は『子どものための道徳 (Value Education For Children)』などで、多くは英語で書かれている。主な内容は、挨拶をする、社会のルールを守る、人助けをする、などの日常生活についてである。この教科において、イスラームは否定されているわけではなく、礼拝の項目ではモスク、教会、スィク寺院、ヒンドゥー寺院の礼拝を比較させる形で、それぞれの宗教を紹介している [Farooki 2007]。

されてきた。2010年の10歳以上の識字率は58%で、性別では男性が69%、女性が46%である。地域別にみると、都市部は74%であるのに対し、農村部では49%に留まっている¹⁵⁾ [GoPSD 2011: Table 2.14(a)]。純就学率は男性が60%、女性が53%で、全体では56%である¹⁶⁾ [GoPSD 2011: Table 2.6(a)]。これらの数値に対し、本稿で取り上げるパンジャープ州とスインド州は、識字率がそれぞれ60%と59%、就学率が61%と53%であり、スインド州はおおよそ平均値、パンジャープ州は平均値よりも高数値である。表1は、パキスタンにおける純就学率を示したものである。この表からも、進級するごとに就学率が下がっており、パキスタンにおいて初等教育が重要であることがわかる。

パキスタンの識字率や就学率の低さの外的要因として、義務教育の体制が整っていないこと、無償教育ではないことが挙げられる。また、社会文化的な背景として、娘を共学学校に入れることや男性教師の下で就学させること、もしくは学校に行かせること自体を嫌悪する慣習などが弊害となっている。パキスタンの初等教育普及の低迷は、国際的にみても批難の対象となっている。現在、UNICEFやNGO団体が地域に入って支援に取り組んでおり、地元コミュニティベースでの教育普及活動も行なわれている。このような取り組みにもかかわらず、パキスタン政府としての対応は遅れており、結果的に著しい成果はみられない。

政府の教育への関心の低さには、軍事に依存する国家体制が指摘できる。パキスタンは1947年8月に独立したものの、建国後の10年間に大統領は3回、首相は7回入れ替わった。このような事情から、国家維持のために政治家ではなく軍に依存する体質が出来上がり、建国初期のパキスタンの国防費は経常支出の67.2%にも及んでいる。しかも、そのような軍事費による教育や保健衛生分野の圧迫は、必要悪として容認されてきた [深町 1992: 157]。現在のGDPに対する公的教育支出は2.0%で、成人識字率とともに世界で134位である [UNDP 2004]。独立時、教育制度は植民地時代のものをそのまま受け継いでおり、植民地政策と同様、

表1 パキスタンにおける純就学率 (%)

	パキスタン全土			パンジャープ州			スインド州		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
初級学校	56	60	53	61	62	59	53	57	48
初等学校	20	22	19	23	23	22	19	21	17
中等学校	12	12	12	14	13	16	11	12	10

出所：[GoPSD 2011: Table 2.6(a), 2.11(a), 2.13(a)] より筆者作成。

15) 参考値として2004年の成人識字率は53%で、男性が65%、女性が40%、都市部は71%、農村部では44%であり、僅かながら識字率が上昇していることが示されている [GoPSD 2005: Table 2.14(a)]。

16) パキスタンでは、純就学率と総就学率が乖離しており、パキスタン全土の総就学率は初級学校が92%、初等学校が53%、中等学校が54%である。これは相当年齢を過ぎてからの成人教育や、学年試験を及第できず留年をする学生が多いことを裏付けている [GoPSD 2011: Table 2.3(a), 2.10(a), 2.12(a)]。

初等教育を犠牲にして官僚育成のための高等教育が重要視されてきた。

3.2 教科書の作成過程

教科書は、各州の教科書委員会の複数の専門家の手を経て作成される。本項では具体的な教科書の作成方法と流通の経路、それらを指揮する教科書委員会についてまとめる。

まず、教育政策に沿って教育省カリキュラム局がカリキュラムを作成する。このカリキュラムは各州に配布され、各教育委員会がカリキュラムに則ったシラバスを作る。そのうえで、教育委員会の委員と外部の学識者らで複数のチームを組み、それぞれが教科書の草案を作成し、その中からコンペティションを通して優良なものを採用する。この草案をもとに内外部の専門家らによって教科書が執筆される。執筆された内容は再び教育委員会で検討され、修正される。こうして出来上がった原稿が教育省に提出され、検閲を受けたうえで各州の教育委員会が認定を与える [‘Abbās 1993: 54-55]。認定された教科書は政府と契約した民間の印刷所で印刷され、民間の書店に並ぶ。生徒やその家族は、自ら書店に赴いて教科書を購入する。教科書の流通度についてのまとまった統計は発行されていない。ただし、公立学校の児童・生徒は原則として州の認定教科書を使うことになっているため、各地域の就学生徒数から推測することが可能である (参考資料 2. 写真 1 を参照)。¹⁷⁾

このように、教科書作成の中心となるのが教科書委員会である。¹⁸⁾ 委員会は政府の教育省の監督の下、各州に設置されている。教育方針や教育政策は教育省、カリキュラムは教育省内のカリキュラム局が作成しているものの、実質的に教科書の内容を選定しているのは各州の教科書委員会である。特に、人口と経済が集中するパンジャープ州の教科書委員会 (Punjab Text Book Board: PTBB) は、他州に対して圧倒的な影響力をもっている。¹⁹⁾ この委員会はパンジャープ州内に限らず、カシュミール、北方山岳地域、国外のパキスタン人学校の教科書も担当している [‘Abbās 1993: 19]。また、人材や財力の不足から独自の教科書を作ることのできない州では、パンジャープ州の教科書を採用している。たとえば、バローチスターン州発行の家庭科の教科書はパンジャープ州の教科書をもとに、調理の内容などに地域性を加味してある [鈴木 1999: 66]。パンジャープ州に続いて大きな教育委員会は、スィンド州教育委員会 (Sindh Text Book Board: STBB) である。

17) パンジャープの教科書には、執筆者や編集委員の名前とあわせて発行部数も掲載されている。たとえば、ウルドゥー語 1 年生用の教科書は初版で、増刷が 7 回されており、印刷発行部数は 26,000 部、金額は 1 冊 23 パキスタンルピーである [PTBB n.d.(2008)a]。また、6 年生は改訂第 2 版で、増刷が 11 回、印刷発行部数が 26,250 部で、1 冊 50 パキスタンルピーである [PTBB 2003a]。

18) 各州の 1 年生から 12 年生までの教科書作成を担当する。大学を含む 13 年生以上の高等教育では、民間の出版社や大学が独自の教材を作成している [‘Abbās 1993: 54]。

19) パンジャープ州 (55.6%) とスィンド州 (23.0%) をあわせると、パキスタン全人口の約 8 割を占める。一方、面積では両州あわせて 5 割に満たない。これは、パンジャープ州とスィンド州の都市部に人口が集中し、また、ハイバル・パシュトゥーン・フワー州とバローチスターン州の大半が農業の困難な山岳地帯であることに起因する。

3.3 教科書の概要

次に、本稿で取り上げる教科書について、その概要を述べる。本稿では、ウルドゥー語の授業に使われる『授業の本 (*Darsī Kitāb*)』(1-2年生)、『わたしたちの本 (*Merī Kitāb*)』(1-4年生)、『ウルドゥー語 (*Urdū*)』(3年生以上)、『ウルドゥー語の文法と作文 (*Urdū Qavā'id wo Inshā*)』(9-10年生)と、社会科の授業で使われる『社会科 (*Ma'āsbratī 'Ulūm*)』(1-8年生)、パキスタン学の授業で使われる『パキスタン学 (*Muṭāla'ah-e Pākistān*)』(9-12年生)を扱った。本論文で分析対象とした教科書のリストについては、参考資料1.の「教科書目次」と、引用文献リストの「一次資料」を参照されたい。

ウルドゥー語の教科書のページ数は、1年生では平均40ページ、2年生では96ページ、3年生では112ページ、4年生で90ページ、5年生では74ページ、6年生では140ページである。また、各課のページ数の平均は、1年生で1課が2.2ページ、2年生では2.4ページ、3年生では2.6ページ、6年生で2.7ページと、さほど増加はみられないが、文字が格段に細かくなっていくため量は増えている。低学年の教科書には挿絵が多く含まれ、大部分がカラー印刷である。²⁰⁾ 学年が上がるにつれて挿絵は減り、文字数が増えている。なお、地図や年表、図表はほとんど見当たらない。

また、表紙の内側か裏表紙に国歌 (*Qaumī Tarānah*) と建国の父ムハンマド・アリー・ジンナーの演説文、彼の肖像画が載せられている [PTBB 2002, 2003a, 2006, n.d.(2008)a, n.d.(2008)b, n.d.(2008)c; SSAS n.d.a, n.d.b]。演説文は1947年9月26日の講演会の場で、パキスタンにおける教育の重要性を説いたものである。演説はもともと英語でなされており、英語で書かれた教科書では原文のまま、ウルドゥー語教科書ではウルドゥー語に翻訳されている。

ウルドゥー語の教科書の内容については、イスラームに関するトピックの多さが目に付く。どの学年でも、第1課は神を賛美する詩が取り上げられており、第2課は預言者ムハンマドを讃える文章である [PTBB 2003a, 2004, 2005, 2006, n.d.(2008)a, n.d.(2008)b, n.d.(2008)c, n.d.(2008)d; STBB 2003a, 2003b, 2003c, 2003d, 2003e, 2003f, 2003g]。この他にも、クルアーンについてや [PTBB n.d.(2008)a: 4, n.d.(2008)b: 13, n.d.(2008)c: 45]、礼拝の方法 [PTBB n.d.(2008)b: 79, n.d.(2008)c: 42]、ムスリムとして正しく生きること [STBB 2003d: 41-45; PTBB n.d.(2008)d: 83] などを題材とした文章が多い。挿絵ではカアバ神殿 [STBB 2003c: 10; PTBB 2006: 1] やモスク [STBB 2003a: 9; PTBB 2006: 19] などが描かれている。

パキスタンの学校における歴史 (*tārikh*) 教育に関して、2節で触れたように「パキスタン

20) たとえば、スィンド州2年生用のウルドゥー語の教科書では、108ページ中、86ページに動物や車などの挿絵が入っており、すべてカラーページである [STBB 2003a]。一方、8年生では150ページ中15ページにジンナーなどの写真や挿絵があり、表紙以外は白黒印刷である。また、フォントも小さくなっており、長文の読み物が増えている [STBB 2003f]。

史」や「世界史」という教科は現教育制度では存在しない。その代わりに、社会科やパキスタン学の中で歴史に関する項目が教えられている。社会科とパキスタン学は、パキスタンの地理や歴史、社会について学ぶ総合科目である。その範囲は幅広く、公民、環境、政治、経済、南アジアのスーフィー、独立運動、言語、文化、国際関係などに及んでいる。

社会科やパキスタン学の教科書の構成としても、ウルドゥー語の教科書と同様に、高学年になるにつれ挿絵が減って分量が増えている。地図については学年が上がるにつれてより多く挿入されている。

4. 教科書にみられる歴史言説

本節では、パンジャブ州とスィンド州で使用されている教科書を具体例として取り上げ、ウルドゥー語で書かれた歴史言説の事例を分析する。国語の教科書の中で語られる国の歴史は、必ずしも年代順にはなっていない。パキスタン学にしても、歴史は授業の一部であり、内容も断片的である。ここでは、テーマを(1) イスラーム王朝史、(2) イギリス植民地支配と独立運動、(3) カシュミール問題とバングラデシュ独立、(4) 諸民族・諸宗教の平等の4項目に絞り、関連する記述を整理する。本節では、事件の背景や経緯について詳細に述べることは避け、それぞれの出来事に対して教科書の中でどのように説明されているのかに焦点を置く。

4.1 イスラーム王朝史に関する記述

南アジアにイスラームがもたらされたのは8世紀のことである。現パキスタンのスィンド地方に、ムハンマド・イブン・カーシム将軍(694-715頃)²¹⁾が上陸したとされている。10世紀のガズナ朝、それを滅ぼしたゴール朝、さらにデリーを中心に栄えたデリー・スルターン朝と、南アジアではムスリムの諸王朝が勃興した。まず、イスラームが到来する以前から8世紀前後までの記述を提示する。

IV-1-1. 「今から数千年前、この土地(zamīn)にはほんの少しの人しか住んでいませんでした。当時の人々はジャングルで暮らしていて、生活はとても簡素でした」

(パンジャブ ウルドゥー語4年生) [PTBB n.d.(2008)d: 77]

IV-1-2. 「この発掘により、モヘンジョダーローが発見された。…この遺跡群から、今日より1000年ほど前にスィンド川のほとりで人々が町を作り出したことがわかつ

21) 8世紀初めにスィンド地方を征服したウマイヤ朝の武将。インダス川下流のヒンドゥー王ダーヒルがムスリムの舟を襲う海賊を取り締まらなかったため、ウマイヤ朝のイラク総督に命じられ、711年(708年、712年という説あり)にスィンド地方に遠征した。アラブによるスィンド支配は、11世紀のガズナ朝の支配まで続いた [長島 2002: 112].

た。…そのあと、中央アジアから来たアーリヤ人 (āriyon) がスィンドを征服した。そしてこの土地を統治していた。その後イラン人 (irānī) とギリシア人 (yūnānī) が来た。ムハンマド・イブン・カーシムの到来からおおよそ 200 年前、5つの氏族による政府が樹立された。5氏族の王ダーヒルの統治時代に、アラブ人 (‘arab) がスィンドを支配した。そして南アジアにイスラームが広まった。711年にこの道からムハンマド・イブン・カーシムがイスラームのお告げを持ち込んだため、スィンドは『イスラームの門 (bāb al-islām)』と呼ばれている」

(スィンド 社会科 5 年生) [STBB 2003i: 14-15]

- IV-1-3. 「古代には、中央アジアからアーリヤ人種 (nasl) の人々が行き来していました。アーリヤ人は、戦いにおいて土地の (maqāmi) 人々よりも秀でていました。彼らのもつ武器 (hathiyār) も立派なものでした。そのため、彼らはここの住民 (bāshindah) を自分たちの奴隷 (ghulām) にしました。

古代には、人々はすべてのものを崇拝 (pūja) し、ある種の利益を得たり不利益を届けさせたりしていました。アーリヤ人はこれを女神 (devī) や神 (devtā) と呼ぶようになりました。こうしてヒンドゥー教 (hindūmat) の基礎が築かれました。ヒンドゥー教を信じる人々をヒンドゥー (hindū) と呼びます。

712年に、アラブ (‘arab) の将軍 (sipah sālār) ムハンマド・イブン・カーシムがパキスタン・インド亜大陸を襲撃しました。そしてスィンドを征服し統治 (ḥukūmat) を打ち立てました。これからおおよそ 500 年後、ムスリムはここに自分たちの政府を作りました。この統治は英国人の襲来まで続きました。この間、かなりのヒンドゥー教徒がムスリムに改宗しました。しかし多くの住民はヒンドゥーであり続けました。ヒンドゥー教徒はムスリムの統治をよく思っていなかったのです。ムスリム統治者が強制的にこの国を襲撃したと考えていたのです」

(パンジャーブ 社会科 5 年生) [PTBB 2000b: 105-107]

- IV-1-4. 「昔々、ガズナは世界にその名が知れ渡る有名な街でした。そこでは、サブクタギーン (subkutagin) という王 (bādshāh) が統治 (ḥukūmat) していました。彼は鹿狩りが趣味でした。…サブクタギーン王は子鹿を捕まえ、馬の背に乗せて町に向かって出発しました。母鹿は遠くからこれを見ていました。自分の子鹿が狩られ連れて行かれるのを見た時、母鹿は不安になり、自らの危険を省みずに馬の後について行きました。サブクタギーンは母鹿のわが子への愛情を目の当たりにし…子鹿を放してやりました」

(スィンド ウルドゥー語 3 年生) [STBB 2003c: 42-43]

スィンド州の教科書では、州内にあるモヘンジョダーロー遺跡の記述が見受けられた [STBB 2003a, 2003b, 2003c]. しかし、イスラーム化以降の歴史に比べると、インダス文明や、ガンダーラ遺跡、ハラッパー遺跡への言及は相対的に少ない。これらの古代文明の代わりに、自国史の始まりにはスィンドへのイスラームの到来が挙げられ、ガズナ朝やイスラーム諸王朝の記述が続いている [PTBB 2002].

デリー・スルターン朝の時代からは、スーフィー（イスラーム神秘主義者）の活動が本格化した。彼らスーフィーやワリー（聖者）の役割を評価した読み物が多い [PTBB 2002: 15-17, 2005: 98-100; STBB 2003b: 25].

IV-1-5. 「インド亜大陸におけるイスラームの布教 (ishā'at) について、スーフィーたち (ṣūfiyā) や聖者たち (mushā'ikh) の及ぼした影響は特筆すべきである。スーフィーたちはイスラームへの改宗 (tabligh) において大きな役割を果たした。彼らの純潔な生き方や、素晴らしい道德観 (akhlāq) に感化され、多くのヒन्दゥー教徒がイスラームを受け入れた」

(パンジャープ パキスタン学 9-10 年生) [PTBB 2002: 8]

IV-1-6. 「パキスタン・インド亜大陸に、イスラームの光 (islām ka nūr) を広めたスーフィー聖者 (ṣūfi buzug) たちの中で、アリー・フジュウィーリー様²²⁾ はその筆頭に挙げられる。その御方はイスラームの布教において遺憾なくお力を発揮された。その御方の人格と行幸に感化され、とても多くの住人がムスリムになった」

(パンジャープ ウルドゥー語 6 年生) [PTBB 2003a: 47]

IV-1-7. 「ダーター・ガンジュ・バフシュ様は、スルターン・イブラーヒームの治世 (ḥukūmat) にラーホールにいらっしゃり、ここに住まわるようになりました。当時はラーホールに限らず、どこでも偶像崇拜 (but parastī) の時代でした。その御方は、ここの人々にイスラームを布教 (tabligh) し始めました。人々はその御方の知識 ('ilm) と素晴らしい道德観 (akhlāq) にとても感銘を受け、イスラームを受け入れるようになりました。その御方の近くに来た者は誰でも、宗教 (dīn) についてのたくさんの知識 (ma'alūmāt) を得ることができました」

(スィンド 社会科 2 年生) [SSAS n.d.b: 15]

IV-1-8. 「世界の他の地域でもそうであったように、わたしたちの土地 (zamīn) にも多くのウラマー ('ulamā) や聖者 (ṣūfiyā) がおいでくださりました。彼らは邪教 (kafr) や多神教 (shark) の地に光をもたらしました。古い時代ですと、アリー・

22) ガズナ出身の神秘主義者 (1009-1072 頃)。ダーター・ガンジュ・バフシュの尊称で知られる。旅を通じて各地で学識を積み、ペルシア語による神秘主義関連の著作を残した [藤井 2002: 845].

フジュウィーリー師の名が高名でしょう。この方はダーター様の名前で知られ、ダーター・ガンジュ・バフシュとも呼ばれます。この御方はラーホールを布教 (tabligh) の中心地となさいました」

(パンジャープ ウルドゥー語 4 年生) [PTBB n.d.(2008)d: 37-38]

これらのスーフィーらは、各地の聖者廟で祀られている。特に、ラーホールのダーター・ガンジュ・バフシュやイスマール・ラーホーリー、スインドのラール・シャハバズ・カランドルなどが著名である [PTBB 2002: 5].

デリー・スルターン朝最後のローディー朝を滅ぼしたムガル朝は、16 世紀からイギリスの植民地支配が確立される 19 世紀半ばまで、南アジア中にその版図を広げた。ムガル朝の歴史は、学年を問わず頻繁に紹介されている。

IV-1-9. 「アクバルはムガル王朝の中で最も有名な皇帝であった。彼は長いこと国を統治した。彼は南アジアの北と南の地域をムガル王朝に加え、王朝を安定 (mustahkam) させた」

(スインド 社会科 6 年生) [STBB 2003j: 86]

IV-1-10. 「バーブルは高名な王 (bādshāh) でした。彼の息子フマユーンは病気になってしまいました。バーブルは熱心に治療 (‘ilāj) させましたが、息子の体 (tan) は良くなりませんでした。とても優秀なお医者さま (hakīm) の治療でも回復しないとわかると、息子を愛するバーブルはとても落ち込みました。…ある善良な男がアッラー (allāh ta‘ālā) に犠牲 (qurbān) を捧げるよう助言 (mashwarah) しました。…バーブルは少し考えてから答えました。「最も愛しくて (piyārī) 高価な (qīmatī) ものは私自身の命 (jān) です」そう言うと彼は立ち上がって身を清め (wuzū), フマユーンのベッドの周りをまわり、祈り (du‘ā) を始めました。「…私は自分の命を差し出そう。私の祈りを受け入れ (qubūl), 私の息子に健康 (ṣeḥat) を与え給え」…フマユーンの体は回復しました。…数日後にはフマユーンは全快し、バーブルは熱の病で亡くなりました」

(パンジャープ ウルドゥー語 2 年生) [PTBB n.d.(2008) b: 90-91]

IV-1-11. 「歴史のある建物を見に、国 (mulk) 中の人々が遠くからやってきます。それらの建物の中に、ムガル朝 (mughal bādshah) 時代に建てられたラーホール城 (qil‘e), 城壁 (faṣīl) とその門の他、シャーリーマール庭園やバードシャーヒー・モスク、ジャハーンギール帝の墓、ヌール・ジャハーンの墓廟…などがあります。ラーホールは歴史的な町として、世界中で有名です」

(スインド 社会科 2 年生) [SSAS n.d.b: 11]

IV-1-12. 「ハズラト・ミヤーン・ワーリス・シャー²³⁾ は、パンジャーブの有名なスーフィー詩人 (ṣūfī shā‘ir) です。スーフィーとは心が清く澄んで (pāk ṣāf) いて、シャリーア法に従い、アッラーに心を寄せている人のことです」

(パンジャーブ ウルドゥー語 4 年生) [PTBB n.d.(2008)d: 73]

IV-1-12 の他に、ムガル朝末期の思想家シャー・ワリーウッラーの記述もみられた [STBB 2003i: 140-141].

以上のように、19 世紀にイギリス植民地支配が開始されるまでの時代区分では、南アジアで勃興したムスリム諸王朝の歴史が強調されていることがわかった。特に、これらの王朝下で活躍したスーフィーや思想家が高く評価されていた。一方で古代文明の記述が少なく、8 世紀のイスラーム到来をもってパキスタンの歴史の始まりとしている箇所もあった。また、マラータ王国やその他のヒンドゥー諸王朝などについての言及は見受けられなかった。

4.2 イギリス植民地支配と独立運動に関する記述

1600 年、カルカッタにイギリスの東インド会社が設立された。18 世紀に入ると、徐々に没落しつつあったムガル朝に替わって東インド会社が南アジアにおける影響力を広げ、1857 年のインド大反乱の鎮圧の翌年からイギリスによる直接統治が開始された。19 世紀の後半には、ムスリムの中でも親英的な近代改革主義者が現れ、西洋的・科学的知識の修得が唱えられた。その中心となってきたのがサル・サイイド・アフマド・ハーンである [STBB 2000: 81-82, 2003g: 99-103; PTBB 2002: 15-17]. 彼はムスリムのための近代教育を唱え、アリーガルにムスリム大学を設立した。その他、ジャマールッディーン・アフガーニー (1838-1897)²⁴⁾ など、イスラーム復興に関する思想家や政治家の伝記も教科書に見受けられる [PTBB 2006: 15-16].

IV-2-1. 「サル・サイイド・アフマド・ハーンのような政治思想家や教育の専門家たちは、ある集団の経済 (ma‘āshyāt) が占領 (qabzāh) されると、その集団の教育 (ta‘alim) や社会 (ma‘āshrat) や文化 (ṣaqāfat) も占領されてしまうことに危機感を覚えていました。サル・サイイドは、ムスリムの発展 (taraqqī) と日常生活の向上に着目しました。彼は、この第一歩としていくつもの町にマドラサ (madrasah) を作りました。後にアリーガルにカレッジを建てました。サル・

23) ムガル朝期に活躍した思想家 (1722-1798).

24) イラン出身。ヨーロッパ列強の侵略にさらされつつあるイスラーム世界において、社会の内部改革と帝国主義への抵抗のための団結を訴えた思想家、革命家 [栗田 2002: 36].

サイイド・アフマド・ハーンは教育の振興 (farogh) とともに、ムスリムとヒンドゥー教徒は異なる民族 (qaum) であるというムスリムの特性も強調しました」
(パンジャープ 社会科 5 年生) [PTBB 2000b: 122]

IV-2-2. 「1857年の大反乱の後、ナズィール・アフマドはアッラーハーバードの副監査官として勤め、その間に英語を独学した。その後カーンプル郡の長官になった。彼は有名な英語の本をウルドゥー語 (urdū) に翻訳し、2年後には副徴税官になった。ナズィール・アフマドはデリーに移住してから、執筆に専念するようになった。1897年に彼の知的・文学的な貢献に対して、政府から知識の太陽 (shams al-'ulamā) の褒章が与えられた」

(パンジャープ ウルドゥー語 6 年生) [PTBB 2003a: 17]

IV-2-3. 「パキスタンが出来る前、スィンドのムスリムの教育 (ta'alīm) 制度は良くありませんでした。学校やカレッジはとても少なかったのです。…ハサン・アリーは国 (qaum) の仕事において重要な役割を果たしました。…彼はムスリムに知識 'ilm の光を広げるために、カラチに『スィンド・マドラサ (sindh madrasah)』を設立しました。わたしたちの国 (mulk) の膨大な数の人々がここで教育を受け、今日でも学んでいます。偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam) ムハンマド・アリー・ジンナーもこのマドラサで勉強しました」

(スィンド ウルドゥー語 3 年生) [STBB 2003c: 39-40]

20世紀に入ると、知識人層の間でイギリスからの独立自治が唱えられるようになり、数多くの独立運動 (tehrīk-e pakistān) の指導者が登場した [STBB 2003e: 95-98]。初代首相リヤーカット・アリー・ハーンや [PTBB 2003a: 63; STBB 2003b: 18-19]、ジンナーを支えた実妹ファーティマ・ジンナー [PTBB 2003a: 85, n.d.(2008)c: 58; STBB 2003d: 25-27]、詩人であり「ウルドゥー語ジャーナリストの父」と称されたマウラーナー・ザファル・アリー・ハーン [PTBB 2003a: 20] などを取り上げられている。

IV-2-4. 「パキスタンの大衆 ('awām) はリヤーカット・アリー・ハーンを『国の指導者 (qā'id-e millat)』の尊称で呼んでいます」

(スィンド 社会科 1 年生) [SSAS n.d.a: 6]

IV-2-5. 「1951年8月16日のことです。ラーワルピンディーの大きな集会 (jalsah) で、リヤーカット・アリー・ハーンは演説をするために立ち上がったその時、国 (mulk) の敵 (dushman) が発砲して彼を殉教 (shahīd) させたのです。彼は国家 (mulk) と国民 (qaum) をどれほど愛していたことでしょうか。彼は死に

際にこのような言葉 (alfāz) を残しました。『神 (khudā) よパキスタンを守り (hifāzat) たまえ』

(スインド ウルドゥー語 3 年生) [STBB 2003c: 19]

- IV-2-6. 「ファーティマ・ジンナー女史は、偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam) の妹でした。彼女はムンバイで教育を受けました。彼女は自分のお兄さんのことがとても大好きでしたので、いつも偉大なる指導者と一緒にいました。…彼女は兄と一緒に解放 (āzād) のために尽力しました。そして、ムスリム女性の間に解放の気運を芽生えさせたのです」

(スインド 社会科 2 年生) [SSAS n.d.b: 18]

- IV-2-7. 「さあ、このパキスタンの塔 (minār-e pākistān) のはなしを聞いてみましょう。…『わたしは一本の塔に過ぎないけれど、わたしの中にはパキスタンのすべての歴史が隠れています。パキスタンを作るためにとてもたくさんの犠牲 (qurbān) を出してきた人々の歴史です。わたしが今立っているこの場所に、1940 年 3 月 23 日にムスリムの指導者 (rah-numā) たちが重大な決定をするために集まったのです。彼らは、祖国 (waṭan) をイギリス (angrezon) から解放することを望んでいました。彼らはすでに隷属の人生に嫌気が差しており、自由 (āzādī) を求め、自分たちの国 (waṭan) に自分たちの政府 (hukūmat) を打ち立てようとしていました。…ムスリムは真実の自由を得ることを望みました。そこにはムスリムの政府があり、アッラーの法 (allāh ke qānūn) が統治しているのです。この時代のムスリムは、この問題について長年悩み続けていました。そしてついにアッラーマ・イクバルが自分たちのための別の国 (mulk) を作るという解決策を導き出したのです。…偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam) は、イクバルの提案 (tajviz) をとても気に入りました。そして 1940 年にこの構想のための集会を開きました。…彼 (ジンナー) は「インド (hindustān) の北西、北東の州を合わせて、新しいイスラームの国を作りたい。この地域ではムスリムの人口が大多数だ。わたしたちはこの地域にイスラーム政府を建設する権利 (haq) を要求する」と言いました』

(パンジャープ ウルドゥー語 4 年生) [PTBB n.d.(2008)d: 23-24]

IV-2-7 にもその名が言及されているように、建国運動の指導者の中でも特に、建国の詩人イクバルはパキスタンという国家の構想を最初に提起した人物として評価されている。彼についてはその生い立ちから彼の残した詩、政治活動や思想にわたり、幅広く取り上げられている。

IV-2-8. 「イクバルはパキスタン建国を最初に着想 (khayāl) した人物です。…彼は自分の詩 (nazm) を通してムスリムを目覚め (bedāri) させました」

(スインド 社会科 1 年生) [SSAS n.d.a: 4]

IV-2-9. 「そのころ、ここをイギリス (angrez) が統治していました。イギリスはムスリムと対立していて、ヒンドゥー教徒側についていました。ヒンドゥー教徒もムスリムの敵 (dushman) でした。イギリスとヒンドゥー教徒は一緒になってムスリムをいじめていました。ムスリムには仕事を与えませんでした。アッラーマ・イクバルは、このことにとても心を痛めていました。彼はムスリムの自由 (āzād) を求めています。自分たちだけの自由な国 (āzād mulk) です。国の中でイスラームに基づいた人生が送れるような、イスラームの政府 (islām ki ḥukumat) を作りたいと。アッラーマ・イクバルは彼の詩の中でムスリムに解放 (āzād) という感覚を呼び起こしました」

(スインド ウルドゥー語 2 年生) [STBB 2003a: 47-48]

IV-2-10. 「イクバルは彼の詩 (shā'ir) を通して、ムスリムを怠惰の眠りから醒まさせました。彼は自由 (azādī) がとても偉大な恩恵 (ni'mat) であり、隷属 (ghulamī) は卑劣な呪縛であると言いました。…彼は亜大陸のムスリムがイギリスから自由を勝ち取り、自分たちだけの国 (waṭan) に住み、そこでイスラームの原理 (islām ke uṣūl) に則った人生を送ることを望んでいました」

(パンジャープ ウルドゥー語 3 年生) [PTBB n.d.(2008) c: 57]

IV-2-11. 「パキスタンという夢 (khāb) を最初に見たのはイクバルでした。彼以前にもハイダル・アリー、ティープー・スルターン、スラージッドウラー、ファズル・ハック・ヒーラーバーディー、サル・サイイド・アフマド・ハーンがムスリムの解放 (āzād) に尽力しましたが、しかし、パキスタンという構想 (taṣawwur) を打ち立てたのはイクバルが最初でした」

(パンジャープ ウルドゥー語 4 年生) [PTBB n.d.(2008)d: 29]

イクバルがパキスタンの思想的な祖であったのに対し、直接イギリスに対して政治活動を展開し、1947年の建国に導いたとされる『偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam)』ムハンマド・アリー・ジンナーについても、格別の扱いがなされている。彼の顔写真はしばしば学校の教室に掲げられ、教科書の中でも、彼の演説や顔写真が載せられており [STBB 2003a: 15-17; PTBB n.d.(2008)b: 19-20], ウルドゥー語の教科書には彼を称える詩 [PTBB n.d.(2008) d: 45-46] も掲載されている。

IV-2-12. 「わたしたちの国 (mulk) は偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam) の努力によって作られました」

(スィンド 社会科 1 年生) [SSAS n.d.a: 5]

IV-2-13. 「1947 年 8 月 14 日、わたしたちの国 (mulk) パキスタンは建国されました。あまりにもたくさんの努力を続けたため、彼の健康 (ṣḥat) は悪化しました。そして 1948 年 9 月 11 日に死去 (inteqāl) しました。彼のお墓 (mazār) はカーチーにあります」

(スィンド 社会科 2 年生) [SSAS n.d.b: 17]

IV-2-14. 「偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam) の本名はムハンマド・アリー・ジンナーです。彼はカーチーに生まれました。彼は子どものころからとても努力家で、がんばって勉強をしました。彼は初等教育をカーチーで受けたあと、イギリス (inglistān) で弁護士 (wakālat) の試験に合格しました。(イギリスから) 戻ってきてから国 (qaum) のために貢献 (ḥidmat) し、ムスリムを隷属 (ghulāmī) から解放し、わたしたちのすばらしい国 (waṭan) を作りました」

(パンジャーブ ウルドゥー語 2 年生) [PTBB n.d.(2008) b: 19]

IV-2-15. 「わたしたちの目的 (maqṣad) はひとつの国 (mulk) を作ることでした。そこではわたしたちが自由に人生を送ることができて、イスラーム文化 (islāmī tehzīb) が息づき、イスラームの制度 (iqdām) を反映させられるのです。パキスタンを得るために、偉大なる指導者 (qā'id-e a'zam) はムスリムをひとつの旗 (jhaṇḍā) のもとに集めました。…偉大なる指導者は、イスラームを心から愛して (muḥabatt) いました。彼はパキスタンを理想的 (namūne) なイスラーム国家 (islāmī riyāsāt) にすることを望んでいました」

(パンジャーブ ウルドゥー語 5 年生) [PTBB 2000a: 8]

以上のように、植民地期および独立闘争期においては近代改革主義者やパキスタン運動の指導者についての記述が目立ち、特にイクバルとジンナーに関する読み物はすべての教科書の中で確認された。イギリス植民地支配そのものについては、IV-2-9 や IV-2-14 の例にあるように、イギリス (angrez/inglistān) という名前が挙がっているものの、その歴史や植民地支配の経緯などについての記述は限られていた。また、ガンディーやネルーといった同時代のインド側の独立闘士や、ムスリムでありながらヒンドゥー教徒と協調してインドの自治独立を唱えたアーザードに関してはほぼ言及されていなかった。

4.3 カシュミール問題とバングラデシュ独立に関する記述

カシュミールの領土については、独立時からパキスタン・インド両国が帰属権を主張してお

り、同地をめぐる幾度の戦争・衝突が起きている。インド亜大陸にイギリスの植民地支配が確立しつつあった19世紀半ば、この地域にはヒンドゥー王朝であるカシュミール藩王国が成立した。1947年8月、藩王国はインドかパキスタンかへの帰属が表明されないまま独立を迎え、1948年5月に第一次インド・パキスタン戦争が勃発した。この結果設定された1949年の停戦ラインに従い、ギルギット、フンザ、スカルドゥなどの北方地域と、カシュミール地方中のアーザード・カシュミールがパキスタンの管理下に置かれている。法規上、カシュミールはパキスタンから独立した地域であり別個の政府や憲法を有するものの、実質的にはパキスタンとの太いコネクションがある（参考資料2. 写真3参照）。

IV-3-1. 「わたしたちのパキスタンはイスラームの国 (islāmī mulk) です。…わたしたちはみんな兄弟 (bhā'ī bhā'ī) です。パンジャーブ、北西辺境州、スィンド、バローチスターン、カシュミール (Kashmir) はパキスタンの一部 (hiṣṣah) です。この中に住んでいる人はみんなパキスタン人です。わたしたちはみんな自分たちの国が大好き (piyār) です」

(パンジャーブ ウルドゥー語1年生) [PTBB n.d.(2008)a: 9]

IV-3-2. 「さあ、これは誰でしょう。彼らはパターン人の兄妹です。ふたりとも長いクルターとゆったりしたシャルワールを着ています。…こっちはスィンド人の兄弟です。…彼らはパンジャーブの兄弟です。…彼らはバルーチとマクラーン地方の子どもです。…こっちに居るのはカシュミールの子どもです。彼らはシャツとシャルワールを着ています。男の子の頭には帽子が、女の子の頭にはチャードルが覆われていますね。彼らは知識を得ることがとても大好きで、とても遠くから歩いてマドラサ (madrasah) に通っています。この子たちは山岳地帯に住んでいて、とても素早く山を登ることができます。彼らはウルドゥー語とカシュミール語 (urdū aur kashmīrī zabān) を話します。カシュミールでは西洋梨、リンゴ、桃がたくさんとれて、カシュミールの子どもはみんな喜んで食べていますよ。バターのパンやお米が彼らの好物です。

みんなパキスタンの色々な地域 ('ilāqah) に住んでいます。みんなパキスタンが大好きです。大きくなったらみんな国 (mulk) の発展 (taraqqī) のために努力するでしょう」

(パンジャーブ ウルドゥー語4年生) [PTBB n.d.(2008)d: 10-11]

IV-3-3. 「アーザード・カシュミール (āzād kashmīr) では、この数年間で多くの学校が開校しています。その壁には、いつも同じスローガン (na'arah) が書かれています『カシュミールはパキスタンになるだろう！』」

(パンジャーブ ウルドゥー語 4 年生) [PTBB n.d.(2008)d: 72]

- IV-3-4. 「パキスタンの北には、ジャンムー・カシュミール州 (riyāsat) の他に、わたしたちの偉大な隣人で友人でもある中華人民共和国があります。…パキスタンの西にはインド (bhārat) があります。インドの西にはバングラデシュ、マレーシア、インドネシア、ブルネイ・ダルサラーム国などのムスリム国家 (muslim mumalik) があります。これらの国々とパキスタンの関係はとても良好です」

(パンジャーブ パキスタン学 9-10 年生) [PTBB 2002: 49-50]

さらに 1965 年に第二次パキスタン・インド戦争が、1971 年には第三次戦争が起きている。この第三次戦争の結果、インドを挟んだ飛び地であった東パキスタンが、バングラデシュとして独立することになった。

- IV-3-5. 「1947 年にパキスタンが建国された時、わたしたちの軍隊 (fauj) と軍備はとても小規模なものでした。わたしたちの政府 (hukūmat) は建国時から、隣国の敵インド (hamsāyeh dushman bhārat) と対抗できるように軍隊と軍備を拡充するためにとても力を入れていました。今、パキスタン軍は世界でも最良の軍隊のひとつです」

(パンジャーブ 社会科 5 年生) [PTBB 2000b: 85]

- IV-3-6. 「1971 年 8 月 20 日未明のことでした。…インド (bhārat) との国境 (sarḥad) からわずか 64 キロしか離れていないところにいました。その青年パイロットは最初から警戒をしており、すべて見抜いていました」

(パンジャーブ ウルドゥー語 4 年生) [PTBB n.d.(2008)d: 32]

- IV-3-7. 「パキスタンのこの誇るべき息子、ジハードの情熱に酔いしれ、幼少より敵 (dushman) を殺すことを願ってきた若者は、1971 年 8 月 20 日に殉死した。パキスタン政府はこの祖国愛、ジハードの情熱、勇敢さを称え、パキスタンの軍人で最も上位の称号獅子の勲章 (nishān-i ḥaidar) を与えた」

(パンジャーブ ウルドゥー語 6 年生) [PTBB 2003a: 15]

- IV-3-8. 「わたしたちの国 (waṭan) パキスタンと隣国インド (paṛosī mulk bhārat) との間に、1971 年 12 月に戦争 (jang) が起きました。戦いの中で、わたしたちの軍隊 (fauj) のとても勇敢 (bahādur) な若者たちが、祖国の防衛 (dafā') のためにその生命 (jān) を犠牲 (qurbān) にしてきました。その勇敢な者のひとりに、サワール・ムハンマド・フセイン・シャヒードがいます」

(スインド 社会科 2 年生) [SSAS n.d.b: 19]

これらの戦争はいずれも国連などによって仲介され、停戦ラインや実行管理ラインが引かれている。しかし、1990年代に入っても直接衝突は散発しており、現在まで住民の不安は取り除かれていない。ウルドゥー語3年生の教科書では、ジャンムー・カシュミールのカールギルの闘いについて、北部山岳地帯の村出身の青年軍人の武勇伝を載せている。

- IV-3-9. 「北部山岳地帯の村出身の青年軍人ラーラク・ジャーンは…パキスタンのムジャーヒディーン (pākistānī mujāhidīn) と敵の軍 (dushman fauj) のせめぎあう、カールギルの詰所で任務にあたっていた。…1997年7月7日、敵が砲兵隊とともに再び襲撃を掛けてきた。敵はどんな手段を使ってでもこの詰所を占領したがっていた。ラーラク・ジャーンは大砲の玉で致命的な傷を負いつつも、敵との交戦を続けた。…彼は殉死 (shahīd) したが、敵は負けて逃走した (shikast khā kar bhāg gayā)。ハワールダール・ラーラク・ジャーンは、その類い希なる勇敢さ、勇猛さ、尊い犠牲を讃えられ、獅子の勲章 (nishān-i haidar) が与えられた。これは軍人にとって最高位の褒章である」

(パンジャープ ウルドゥー語3年生) [PTBB n.d.(2008)c: 97-99]

この他にも、カシュミールをめぐる国境については、殉死した軍人の話題の中で繰り返し触れられている [STBB 2003f: 113-117]。また、カシュミールの領土を争うインドについては、IV-3-7やIV-3-9のように、具体的な国名が明示されなかった場合でも、敵 (dushman) という表現で暗示されている場合もあった。一方で、バングラデシュについては、社会科7年生の南アジアのイスラーム諸国を紹介する項目の中で取り上げられていた。次がバングラデシュに関する全文である。

- IV-3-10. 「南アジアのベンガル湾の北にはバングラデシュがあります。この国の三方はインドに囲まれていて、南側は海です。この国には5つの川が流れていて、そのうちポッダ川、ブラマプトラ川、メグナ川が重要です。特産はジュート麻で、多くの外貨を稼いでいます。この他に米、茶葉、その他の穀物が生産されています。砂糖、セメント、堆肥、食用油、綿布の工業も発達しています。人口密度が高く、1996年の人口は1億2,310万人です。この国は1971年までパキスタンの東側の一部 (mashriqī ḥiṣṣah) でした。しかし、その後別れて (judā ho kar) バングラデシュになりました (ban gayā)。首都はダッカで、言語はベンガル語です。通貨はタカです」

(スィンド 社会科7年生) [STBB 2003k: 8]

その他、バングラデシュの国名が言及されている箇所は、IV-3-4 や IV-4-5 の他、「南アジアの気候」[PTBB 2000b: 16, 2003b: 2] などの地図上に限られていた。

4.4 諸民族・諸宗教の平等に関する記述

パキスタンには、多言語・多民族が共存している。民族や言語の違いの他、宗教ではスンナ派、シーア派（十二イマーム派）の違いがあり、北部山岳地方にはイスマール派、スィンドのヒンドゥー教徒、クリスチャン、パールスィー（ゾロアスター教徒）、カーディヤーニー（アフマディー教徒）、仏教徒なども住んでいる。

IV-4-1. 「わたしたちは自分たちの宗教 (dīn) と国 (waṭan) を愛しています。わたしたちはみんな勉強 (ta‘alim) が大好きです。わたしたちの姉妹も教育を受けています」

(スィンド ウルドゥー語 4 年生) [STBB 2003c: 22]

IV-4-2. 「わたしたちの国 (waṭan) の名前はパキスタンです。パキスタンはイスラームの国 (islāmī mulk) です。ここには、人口は少ないですが非ムスリム (ghair muslim) も住んでいます。わたしたちの国の旗は 2 色です。白は非ムスリムを、緑色はムスリムの住民を表しています。アッラー (allāh ta‘alā) がわたしたちの国をととても美しくお作りになりました。…わたしたちはパキスタン人であることが誇らしいです。スィンド、パンジャーブ、北西辺境州、バローチスターン、カシュミールがすべて発展することは、わたしたちの祈りです」

(パンジャーブ ウルドゥー語 2 年生) [PTBB n.d.(2008) b: 7]

IV-4-3. 「わたしたちの愛しい国 (waṭan) の名前はパキスタンです。ここはイスラームの国 (islāmī mulk) です。わたしたちの国には主にムスリムが住んでいます。少しだけヒンドゥー教徒や、シク教徒、キリスト教徒、パールスィー教徒、その他の宗教 (mazhab) の人々も住んでいます。わたしたちはみんなパキスタン人です。パキスタンは大きな国です。国には 4 つの州、スィンド州、パンジャーブ州、バローチスターン州、北西辺境州があります。大きな大きな都市も、小さな小さな村もあります。ここではみんな揃って暮らしています。みんな国を愛しています」

(スィンド ウルドゥー語 2 年生) [STBB 2003a: 72]

以上の引用からも明らかなどおり、パキスタンは複数の民族やイスラーム以外の宗教が共存することについて肯定している。このような多種多様な民族的・言語的出自を結びつけるためには、建国の理念でもあるイスラームを引き合いにだす論調が多い。

- IV-4-4. 「グル・ハーンは言いました『…わたしたちムスリムは兄弟 (bha'i bha'i) です。どの家の一員でも、ある部族 (qabile) の出身だとしても、肌の色が白くても黒くても、みんな兄弟です。みんながひとつです』。わたしたちの国 (mulk) はイスラームの名のもとに作られました。ここに住んでいる人たちの絆 (rishtah) は強固なものです。パターン、バルーチ、スィンディー、パンジャービー、みんなひとつです」²⁵⁾

(パンジャーブ ウルドゥー語 2 年生) [PTBB n.d.(2008) b: 32]

また、現代におけるイスラーム諸国との連帯や、国際社会でのパキスタンの役割を説く記述もみられる。

- IV-4-5. 「おじいさんはフィザーに言いました、『バグダードはイスラーム国家 (islāmī mulk) イラクの都市だよ。お前は他にイスラームの国をいくつ覚えているかな』『パキスタン、イラン、サウディアラビア、それから…』『それにアフガニスタン、バングラデシュ、エジプト』『そうだ！シリア、ヨルダン』『よくできました。今、世界にはおよそ 56 のイスラームの国がある』『おじいちゃん、ムスリム (musalmān) はどこの国 (mulk) にいても兄弟 (bhā'i bhā'i) だって先生が言っていたよ』²⁶⁾

(パンジャーブ ウルドゥー語 3 年生) [PTBB n.d.(2008) c: 52-53]

- IV-4-6. 「神 (khudā) のご加護により、今現在、世界のすべてのムスリムには同盟 (ittihad) の気運が高まっています。イスラーム諸国 (islāmī mumālik) はお互いがより近づきつつあります。イスラーム諸国首脳会議 (islāmī sar-barāhon ki kānfarens) は 1974 年にラーホールで開催 (mun'aqid) されました。これは、同盟の何よりも確かな証明でした。今、イスラーム諸国には神 (khudā) の恩恵により連帯が広がりつつあるのです。この友情 (dosti) は強まっているのです」

(パンジャーブ ウルドゥー語 5 年生) [PTBB 2000a: 24-25]

- IV-4-7. 「1974 年 2 月 23 日に、ラーホールで第 2 回イスラーム諸国首脳会議が開催されました。この会議には、40 のイスラーム諸国 (islāmī mumālik) が参加しました。この会議は『ラーホール会議』とも呼ばれています。ムスリムの歴史におい

25) この課の「教師へのアドバイス」の箇所には、「アーザード・カシュミールについても補足しなさい」と書かれている [PTBB n.d.(2008)b: 33]。ただし、どのように説明するかなどの詳細な指示はない。

26) この課の「教師へのアドバイス」の箇所には、「パキスタンがイスラーム世界において初の原子力保有国家であることを補足しなさい」と書かれている [PTBB n.d.(2008)c: 53]。

て、このように多くの国々が賛同したのは初めてのことでした。ラーホール・イスラーム諸国首脳会議は、ムスリムの同盟 (ittihād wo ittifāq) をすべてのムスリムの目の前に示しました」

(パンジャーブ ウルドゥー語 6 年生) [PTBB 2003a: 106-107]

教科書の中で象徴的に語られるイスラームは、スンナ派やシーア派といった宗派の差異や具体性をもっておらず、特定の教団や宗派についての概説なども確認されなかった。また、世界各地に広がるムスリム同胞を賞賛しており、その盟主としてのパキスタンの役割が強調されていた。一方で、パキスタンと同程度のムスリム人口を抱える隣国インドや、もともと同じ国であったバングラデシュのムスリムに関する踏み込んだ記述はみられなかった。このことから、4.2 で取り扱った独立闘争時代の目標であった、南アジアという単位でのムスリムの連帯はすでに断念されていると推察される。

他宗教については、国内のヒンドゥー教徒やクリスチャンに触れられている頻度が少なく、言及される場合には IV-4-2 や IV-4-3 の例のように、平和裏に共存しているという簡潔な説明がなされている。

5. おわりに

本稿では、パキスタンの初等・中等学校で使用されている教科書の分析を通じて、自国を中心としたムスリム社会がどのように描かれ評価されているのか、その特徴や共通性の解明を試みた。

まず、教育制度としては、教科としての歴史がなく、ウルドゥー語やパキスタン学の中にその内容が組み込まれている。このような歴史の記述は「自国史」を中心に編纂されているため、ムスリムとしての歴史に関しては特に強い自負が共有されている。一方、ウルドゥー語は憲法上の国語と定められながらも、実際には植民地時代の教育言語であった英語や、ベンガル語やシンディー語といった各州の地域言語との拮抗の中で定着していった。教育の場においてイスラームとウルドゥーが邂逅する構造が意識的に、意図的に作られていったことを明らかにした。

資料としては、パンジャーブ州やスインド州の公立学校で使われているウルドゥー語教科書を取り上げ、(1) イスラーム王朝史、(2) イギリス植民地支配と独立運動、(3) カシュミール問題とバングラデシュ独立、(4) 諸民族・諸宗教の平等の 4 項目に焦点を絞ってその記述を分析した。その中で、まずパキスタン人はインド人とは異なり、アラブ起源のイスラームを担う民族であるという主張を指摘した。これは 4.4 において、異なる民族を包括したムスリムとしての兄弟愛という形で表出していた。

また、南アジア・ムスリムの自負として、ガズナ朝以来イギリスの支配が及ぶまでインド亜大陸の統治者としての役割を担ってきたという言説が明らかになった。南アジアにおいて、ムスリムは数のうえではヒンドゥー教徒に対するマイノリティである。それゆえに、4.2 で取り上げたように「イギリス人とヒンドゥー教徒に抑圧されてきた」過去をもつ現代のムスリムにとって、ムスリムが長く南アジアの統治者であったことは栄光の歴史となっている。その中でも特に、ムガル朝という南アジアで最も華やかな宮廷文化の栄えた支配者の継承者を名乗ることは、インド中心の南アジアではなく、地域のリーダーとしてのパキスタンの姿を打ち立てるための文化的根拠となりうる。このことと、アラブ・ムスリムという血統とをあわせて、一種の建国神話といえよう。さらに、シャー・ワリーウッラーや、サル・サイイド、イクバルなど、南アジアで生まれたイスラームの遺産を高く評価していることがわかった。

以上の分析をとおり、みえてきたのはアラビア半島から続くムスリムとしての自覚、ムガル朝の継承者としての誇り、19世紀から続くイスラーム復興思想という歴史認識である。これら3つの歴史言説を含んだものが、想像（もしくは創造）された南アジアのイスラームである。このイスラームを、国民に浸透させるためのプラットフォームの形成において、教育言語としてのウルドゥー語の採用は大きな役割を果たした。そのような構造において、輝かしいパキスタンの歴史を、教科書という最も強力なメディアによって国民に刷り込むことで、パキスタン独自のイスラームが創造されてきた。

謝 辞

本稿の執筆にあたっては、大阪大学大学院言語文化研究科山根聡教授より資料の提供を受けました。深く感謝申し上げます。

引 用 文 献

- ‘Abbās, M. 1993. *Textbook Development in Pakistan and United Kingdom*. Lahore: Sang-e-Meel Publications.
- Aziz, K. K. 1993. *The Murder of History: A Critique of History Textbooks Used in Pakistan*. Lahore: Vanguard.
- Baqir, F. 1998. The Role of NGO’s in Education. In P. Hoodbhoy ed., *Education and the State: Fifty Years of Pakistan*. Karachi: Oxford University Press, pp. 177-198.
- Burki, S. J. 1991. *Pakistan: The Continuing Search for Nationhood*. Boulder, Lahore: Westview Press; Pak Book Corp.
- 藤井守男. 2002. 「フジュウィーリー」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 845.
- 深町宏樹. 1992. 「パキスタンにおける政治と軍」山中一郎編『パキスタンにおける政治と権力—統治エリートについての考察』アジア経済研究所, 157-180.
- ハミード, アブドゥル, アブドゥル・ガフル・チョウハダ. 1985. 『パキスタン—世界の教科書』加賀谷寛・浜口恒夫編訳, ほるぷ社.
- Khan, A. 1967. *Friends Not Masters: A Political Autobiography*. Karachi: Oxford University Press.
- Khan, H. A. 1998. Community-Based Schools and the Orangi Project. In P. Hoodbhoy ed., *Education and the State: Fifty Years of Pakistan*. Karachi: Oxford University Press, pp. 199-214.

- Khan, H. U., T. Kurosaki and K. Miura. 2011. *The Effectiveness of Community-Based Development in Poverty Reduction: A Descriptive Analysis of a Women-Managed NGO in Rural Pakistan*. PRIMCED Discussion Paper Series, No. 13, Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.
- 黒崎 卓. 2006. 「コミュニティと経済発展—南アジアのフィールドから考える」『創文』(488): 13-16.
- 栗田禎子. 2002. 「アフガーニー」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 35-36.
- 松村耕光. 2003. 『『パキスタン国民』をつくる』広瀬崇子・山根聡・小田尚也編著『パキスタンを知るための60章』明石書店, 112-117.
- 長島 弘. 2002. 「ムハンマド・イブン・カースィム」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 984.
- Nayyar, A. H. and S. Ahmad, eds. 2004. *The Subtle Subversion the State of Curricula and Textbooks in Pakistan; Urdu, English, Social Studies and Civics*. Islamabad: Sustainable Development Policy Institute.
- Rahman, T. 1999. *Language Education and Culture*. Karachi: Oxford University Press.
- _____. 2000. *Unpleasant Essays: Education and Politics in Pakistan*. Lahore: Vanguard.
- _____. 2002. *Language, Ideology, and Power: Language Learning among the Muslims of Pakistan and North India*. Karachi: Oxford University Press.
- 鈴木洋子. 1999. 「パキスタンの家庭科教育と女性のくらし」『日本家庭科教育学会誌』42(2): 66-67.
- 山中一郎. 1992. 「パキスタンの主要政治エリート」山中一郎編『パキスタンにおける政治と権力—統治エリートについての考察』アジア経済研究所, 3-106.

新 聞

DAWN

一次資料

1. ウルドゥー語教科書 (1-10 年生)

- PTBB (Punjab Text Book Board). 2000a. *Urdū 5*. Lahore: Uṣmān Mujīd Printerz.
- _____. 2003a. *Urdū 6*. Lahore: Shāikh Muḥammad Ḥusayn ainḍ Sanz.
- _____. 2004. *Urdū 7*. Lahore: Sayyad Buk Sentar.
- _____. 2005. *Urdū 8*. Lahore: Qaumī Ṭraidars.
- _____. 2006. *Merī Kitāb 5*. Lahore: Maktabah-e Mu‘īn al-Adab.
- _____. n.d.(2008) a. *Merī Kitāb 1*. Lahore: Kutub Khānah-e Khurshīdah.
- _____. n.d.(2008) b. *Merī Kitāb 2*. Lahore: Khālīd Buk Depo.
- _____. n.d.(2008) c. *Merī Kitāb 3*. Lahore: Jadīd Buk Depo.
- _____. n.d.(2008) d. *Merī Kitāb 4*. Lahore: Niv Kitābistān Pablīshing Kampanī.
- STBB (Sindh Text Book Board). 2003a. *Darsī Kitāb 2*. Karachi: Kāshif Buk Egansī.
- _____. 2003b. *Urdū 3*. Karachi: Qāzī Aisosiāiṣ.
- _____. 2003c. *Urdū 4*. Sukkur: ‘Ajā’ib Istor.
- _____. 2003d. *Urdū 5*. Karachi: Urdū Akādmī Sindh.
- _____. 2003e. *Urdū 7*. Karachi: Al-Ḥāfīz Printīng.
- _____. 2003f. *Urdū 8*. Karachi: Day Times Press (Private) Limited.
- _____. 2003g. *Urdū lāzmi 9-10*. Karachi: Urdū Akādmī Sindh.

2. 社会科, パキスタン学教科書 (1-12 年生)

- PTBB (Punjab Text Book Board). 2000b. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 5*. Lahore: Uṣmān Mujīd Printerz.

- _____. 2002. *Muṭāla‘ah-e Pākistān 9-10*. Lahore: Teksishan Lā’ Buks Pablishez.
- _____. 2003b. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 6*. Lahore: Implā‘iz Wilfer Sosā’iti.
- _____. 2003c. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 8*. Lahore: Shaikh Mubāarak ‘Alī ainḍ Sanz.
- STBB (Sindh Text Book Board). 2000. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 8*. Hyderabad: Yūnīvarsal Buk Depo.
- _____. 2002a. *Ma‘āshratī ‘Ulūm Karāchī 3*. Karachi: Urdū Akadmī Sindh.
- _____. 2002b. *Muṭāla‘ah-e Pākistān 11-12*. Karachi: ‘Ilum wo Amal Buk Depo.
- _____. 2003i. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 5*. Karachi: Sayyad ainḍ Sanz.
- _____. 2003j. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 6*. Karachi: Nafīs Akadmī.
- _____. 2003k. *Ma‘āshratī ‘Ulūm 7*. Karachi: Mashhūr Pres.
- SSAS (Shaikh Shaukat ‘Alī ainḍ Sanz). n.d.a. *Me‘yārī Ma‘āshratī ‘Ulūm: Suālān Jawābān 1*. Karachi: Shaikh Shaukat ‘Alī ainḍ Sanz.
- _____. n.d.b. *Me‘yārī Ma‘āshratī ‘Ulūm 2*. Karachi: Shaikh Shaukat ‘Alī ainḍ Sanz.
(SSAS は筆者が 2009 年にカラーチャーにて購入)

3. その他の教科書（道徳）

Farooki, S. Yasmin. 2007. *Value Education For Children 1*. Lahore: Book Centre. (c2002)

4. 統計資料・報告書

- Aly, J. H. 2007. *A WHITE PAPER Revised: Document To Debate And Finalize The National Education Policy*. Islamabad: National Education Policy Review Team.
- GoPFME (Government of Pakistan Federal Minister for Education). 2005. *The National Education Census*. Islamabad: Government of Pakistan Federal Minister for Education.
- GoPSD (Government of Pakistan, Statistics Division). 2005. *Pakistan Social and Living Standards Measurement Survey (2004-05)*. Islamabad: Government of Pakistan, Statistics Division, Federal Bureau of Statistics.
- _____. 2011. *Pakistan Social and Living Standards Measurement Survey (2010-11)*. Islamabad: Government of Pakistan, Statistics Division, Federal Bureau of Statistics.
- PEC (Pakistan Educational Conference). 1948. *Proceedings of the Pakistan Educational Conference Held at Karachi 27th November-1st December 1947*. Karachi: Government of Pakistan, Ministry of Interior.

5. オンライン文献

UNDP (United Nations Development Programme). 2004. *Human Development Reports*. <http://hdr.undp.org/en/media/hdr04_complete.pdf> (2012 年 11 月 19 日閲覧)

参考資料 1. 教科書目次

(括弧内は教科書の内容を示す筆者注。* 印は本文での引用箇所)

(1) バンジャープ ウルドゥー語 1 年生『わたしの本 (Meri Kitāb)』

課	課のタイトル	内容
第 1 課	神への賛美	詩
第 2 課	親愛なる預言者	預言者ムハンマドの賛歌
第 3 課	アッラーの最後の書	聖典クルアーンについて
第 4 課	アラビア文字	アラビア語の文字の学習
第 5 課	礼拝	アザーンからモスクに礼拝に行くまで
第 6 課	わたしたちはひとつです	4つの民族とパキスタン人としての統一 (*IV-3-1)
第 7 課	挨拶	挨拶を交わす 2 人の少女のやり取り
第 8 課	正直者	詩. 嘘をつかないことについて
第 9 課	すばらしい!	早起きをした少年を教師が褒める
第 10 課	保護	手洗い, うがいなどの推奨
第 11 課	黒い雲がやってくる	詩. 雨の喜び
第 12 課	健康と清潔	清潔にして病気を予防する
第 13 課	旅	少年が乗り物に乗って結婚式へと向かう
第 14 課	アッラーの恩恵	太陽とアッラー
第 15 課	動物と木	牛, ヤギなど動物の紹介
第 16 課	わたしたちの家	ある子どもの家について
第 17 課	わたしたちの学校	学校の日
第 18 課	わたしたちの国	詩

出所: [PTBB n.d.(2008)a]

(2) スィンド ウルドゥー語 2 年生『授業の本 (Darsi Kitāb)』

課	課のタイトル	内容
第 1 課	わたしの神	詩
第 2 課	アッラーの恩寵	全世界をつくった神の偉業
第 3 課	わたしたちの親愛なる預言者	預言者ムハンマドの生い立ち
第 4 課	わたしたちの預言者	預言者ムハンマドの賛歌
第 5 課	犠牲祭	イスラーム暦ズ・ル・ヒッジヤ月 10 日の祭
第 6 課	偉大なる指導者	ムハンマド・アリー・ジンナーの生い立ち
第 7 課	日々の礼拝	親子で日々の礼拝の意義について語る
第 8 課	良い仕事	男の子が自分の父親を手伝う
第 9 課	わたしたちの土地	詩
第 10 課	気候	空気と水の会話
第 11 課	独立記念日	8 月 14 日について
第 12 課	わたしたちの隣人	隣近所の住人といたわり合う事
第 13 課	わたしたちの土地	地形, 土壌, そこに住む生き物など
第 14 課	工場	少年が初めて工場を見る
第 15 課	ムッソーおじさん	詩
第 16 課	わたしは誰でしょう	太陽に関するなぞかけ
第 17 課	アッラーマ・イクバル	(*IV-2-9)
第 18 課	わたしたちの栄養	食事と栄養, 健康について

第19課	さあ、木を植えよう	子どもたちが中庭に木を植える
第20課	列車の旅	列車の旅から見えるものを綴った文章
第21課	考えてみたら…	詩
第22課	わたしたちの都市	都市の市場、交通、畑、学校について
第23課	太陽が昇って世界が起きた	詩
第24課	動物	村の家畜や動物園の動物について
第25課	愛しいパキスタン	(* IV-4-3)
第26課	ラール・シャハバーズ・カラダール	13世紀のスィンドのスーフイー
第27課	空っぽのジャマル・シャーヒー	同名の子どもの遊び
第28課	わたしたちの町	少年たちの町に関する会話
第29課	良い男の子	規則正しい生活をする少年
第30課	小さなひよこ	詩
第31課	偶然の祝福	農村での3本の矢の逸話
第32課	ずる賢い犬	川面に映る自分の姿を見て唾えていた骨を落とす犬の挿絵
第33課	不意の友だち	ねずみとカエルの話
第34課	健康と清潔	病原体の会話
第35課	さあ、何か作りましょう	少年たちが家で手作りをする
第36課	祈り	詩
第37課	アラビア語を学びましょう	アラビア文字の学習

出所：[STBB 2003a]

(3) パンジャーブ ウルドゥー語 4年生『わたしの本 (Merī Kitāb)』

課	課のタイトル	内容
第1課	神への賛美	詩
第2課	わたしたちの預言者	預言者ムハンマドの賛歌
第3課	独立おめでと	ある少年の8月14日の朝
第4課	マディーナの人々	マディーナにまつわる人々
第5課	列を作りましょう	整列すること
第6課	パキスタンの子どもたち	(* IV-3-2)
第7課	ナアト	詩、預言者ムハンマドの賛歌
第8課	大工	大工の仕事について
第9課	洞窟の岩	3人の旅をする男の話
第10課	大きくなったら何になろう	詩
第11課	カバディー	カバディーの競技について
第12課	蛍	詩
第13課	パキスタンの塔のはなし	(* IV-2-7)
第14課	悪戯への罰	猫が犬に悪戯をし、結局痛い目を見るという挿絵
第15課	スレイヤーの正直さ	お金をなくした少女の話
第16課	アッラーマ・ムハンマド・イクバル	(* IV-2-11)
第17課	若い殉教者	殉教した青年将校について (* IV-3-6)
第18課	一緒になしとげましょう	鳩が協力して猟師から逃れる
第19課	愛	詩
第20課	イスラームの布教	歴代の預言者や聖者について (* IV-1-8)
第21課	アスラムの村	少年の住む農村について

第 22 課	健康の秘訣	歯磨き洗顔などを子どもに勧める家族の会話
第 23 課	ああ、偉大なる指導者よ	詩
第 24 課	静かな貢献	第 2 代カリフ・ウマルの逸話
第 25 課	良いおまわりさん	車通りの激しい道で子どもを守る警官
第 26 課	行く時には教えてくれ	詩. 列車について
第 27 課	小さな女の子の大きな仕事	マッカの勇敢な少女
第 28 課	本当のおはなし	16 の偉人にまつわる短い逸話
第 29 課	赤三日月社	イスラーム世界の社会貢献について
第 30 課	ああ、わたしたちの祖国	詩
第 31 課	ミヤーン・ムハンマド・バフシュ	19 世紀のパンジャーブのスーフィー聖者
第 32 課	勇敢な農民	詩
第 33 課	ボランティア	病院で老人を手助けする少年
第 34 課	善行の恩返し	王様と乞食の逸話
第 35 課	電話	電話の仕組みと発明について
第 36 課	アーザード・カシュミールの旅	(* IV-3-3)
第 37 課	ミヤーン・ワーリス・シャー	18 世紀のスーフィー詩人 (*IV-1-12)
第 38 課	1 匹の牛と 1 匹のヤギ	詩
第 39 課	わたしたちの人口	(* IV-1-1)
第 40 課	物語を書きましょう	瓶の中にいるねずみを捕まえようとする猫の挿絵
第 41 課	お父さんからの手紙	カラーチーに行った父からの手紙
第 42 課	同情	3 幕からなる寸劇の台本
第 43 課	ハズラト・ウンム・スライマ	ウンム・スライマの偉人伝
第 44 課	美しい大地	詩

出所：[PTBB n.d.(2008) d]

(4) スインド 社会科 1 年生『標準 社会科 (Me'yārī Ma'āshratī 'Ulūm)』

歴史		
第 1 課	預言者	預言者ムハンマドについて
第 2 課	アッラマ・イクバル	建国の詩人イクバルについて (* IV-2-8)
第 3 課	偉大なる指導者	建国の父ジンナーについて (* IV-2-12)
第 4 課	リヤーカット・アリー・ハーン	初代首相リヤーカットについて (* IV-2-4)
市民生活		
第 5 課	道路の歩き方	道の端や横断歩道を歩くこと
第 6 課	病院	病院の役割
第 7 課	モスク	神の家といわれるモスクの役割について
第 8 課	清潔なからだ	預言者にならない清潔にして病気を予防する
第 9 課	郵便配達人	郵便配達人の仕事
地理		
第 10 課	季節	四季の名称とその違い
第 11 課	方角	東西南北について
第 12 課	パキスタン	国や州の名前, 建国年, 首都, 主要都市
第 13 課	国旗	国旗の色, 形, その意味
第 14 課	産業	農業と工業

出所：[SSAS n.d.a]

(5) スィンド 社会科 6 年生『社会科 (Ma'āshratī 'Ulūm)』

課	課のタイトル	内容
第 1 課	南アジアの概観	南アジアにおけるパキスタンの地理的重要性
第 2 課	南アジアの地理	高度, 山, 平地, 砂漠, 川, 海について
第 3 課	南アジアの気候	海からの距離, 気候の特性, モーンsoon, 寒暖
第 4 課	南アジアの自然	ジャングル, 水利
第 5 課	南アジアの人口	南アジアの子ども, 国旗, 有名な都市
第 6 課	ムスリム到来以前の南アジアの人々	スィンドの古代文明, アーリヤ人の到来, 仏教
第 7 課	南アジアへのイスラームの到来	711 年のイスラーム到来, 各地での戦い (*IV-1-9)
第 8 課	イギリスの南アジア到来	東インド会社, ワリーウッラー, 独立戦争
第 9 課	パキスタンの都市の生活	政府, 社会正義, 法律と自由

出所：[STBB 2003j]

(6) パンジャープ 社会科 6 年生『社会科 (Ma'āshratī 'Ulūm)』

課	課のタイトル	内容
第 1 課	南アジアの概観—パキスタンの位置	南アジアの山脈, 平原, 川, 砂漠
第 2 課	南アジアの気候	海, 気候, 偏西風の流れ
第 3 課	南アジアの資源	井戸, 灌漑, 穀物, タバコの葉, 塩
第 4 課	南アジアの人口	南アジア各地の人口, 国旗, パキスタンの都市
第 5 課	ムスリム到来以前の南アジアの社会	モヘンジョダーロー発掘, ヒンドゥー支配, 仏教
第 6 課	南アジアへのイスラームの到来	イスラーム伝播, 文明・文化の普及, 建築
第 7 課	イギリスの南アジア到来	東インド会社, 1857 年独立戦争, サイド・アフマド・ハーン

出所：[PTBB 2003b]

(7) スィンド パキスタン学 11-12 年生『パキスタン学 (Muṭāla'ah-e Pākistān)』

課	課のタイトル	内容
第 1 課	パキスタン建国	パキスタン論, ジンナー, 各州での独立運動
第 2 課	パキスタンの歴史	1939 年から 1948 年の歴史
第 3 課	イスラーム共和国の成立	パキスタンの成立と憲法制定
第 4 課	パキスタンの大地	地理, 気候, 自然
第 5 課	パキスタンの文化	パキスタンの文化遺産, ラーホール城, 音楽など
第 6 課	パキスタンの諸言語	ウルドゥー, 各州の言語
第 7 課	経済計画と発展	1950 年代から 2000 年の 5 ヵ年経済計画
第 8 課	パキスタンと同胞世界	国連, イスラーム諸国首脳会議, 経済協力

出所：[STBB 2002b]

参考資料 2. 教科書の写真

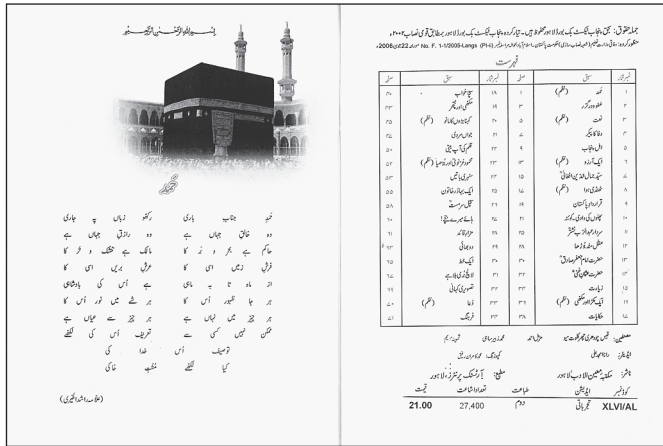


写真 1 パンジャブ ウルドゥー語 5年生

右ページの枠内は目次，その下に編集者，出版社，発行所，出版部数などの情報，左ページは第 1 課神への賛美をうたった詩。イラストはカアバ神殿 [PTBB 2000a: 内表紙裏, 1].



写真 2 パンジャブ ウルドゥー語 2年生 (*IV-4-4)

右ページ上に課のタイトル，その下から左ページ上段までが本文，左ページ中段に 4 つの本文に関する問題，下段に単語に関する問題，その下に教師への 3 つのアドバイス，右ページのイラストはパキスタンの各州の民族衣装を着た子ども [PTBB n.d.(2008) b: 32-33].

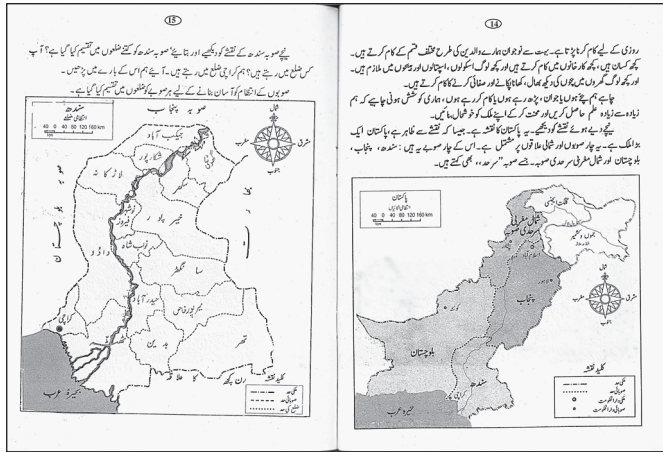


写真3 スィンド 社会科 3年生

右ページの地図はパキスタンの行政区分を示したもの。カシュミール地域には点線で「実行管理ライン」が引かれ、線の右側に「ジャンムー・カシュミール」、左側に「ギルギット地区」と書かれている。左ページはスィンド州の行政区を示した地図。地図の右側には「インド」と書かれている [STBB 2002a: 14-15].